

〔翻訳〕

トマス・ホップズ著『物体論』抄訳（2）

—— 第2部第7・8章 ——

伊藤 宏之・渡部 秀和

目次

献辞 私の敬愛する親愛なるウィリアム・デヴォンシャー伯へ

著者から読者への献呈の書簡

第1部 計算もしくは論理

第1章 哲学

第6章 方法について（以上本誌第5号）

第2部 哲学の第一基礎

第7章 場所と時間について

第8章 物体と偶有性について

第2部 哲学の第一基礎

第7章 場所と時間について

1. 存在しない事物は、決して理解されもしないし、計算されもしない。2. 空間とは何か。3. 時間。4. 部分。5. 分割。6. 一つ。7. 数。8. 結合。9. 全体。10. 隣接し、継続する時と場所。11. 始まり、終り、距離、有限、無限。12. 力における無限とは何か。無限であるものは、一つであるとも全体であるとも語るができず、また、空間、時間、数について語ることもできない。13. 分割は最小を生み出さない。

1. 存在しない事物は、決して理解されもしないし、計算されもしない。

自然哲学を教えることにおいては、(私が既に示したように)「方法的な世界消去 *privation*」,つまり、方法的に世界が消え去ったと仮定するよりも他によい状態を考えることができない。しかしながら、もし、全ての事物のそのような消去が想定されたとしても、おそらく、残った人（その人は事物のこの普遍的消去から唯一除外されるのであるが）に、哲学の対象として考慮すべき、もしくは論ず

ること全てについて何事かが残っているかを、もしくは推論の目的のために名称を与えるべき何が残っているのかを、尋ねることはできるだろう。

それゆえ、私は、その人には、彼が方法的な世界消去以前に彼の眼で見ていたもの、もしくは何らかの他の感覚で識別していたもの、つまり、それらの秩序や部分についての大きさ、動き、音、色、その他の記憶や想像である物体や世界についての観念が残ると言うのである。それらの事物は全て、その人に想像によって内面的に発生した観念や幻想に他ならないのであるが、それでもなお、それらはあたかも外在的に、そしてまったく精神の何らかの力に依拠せずに存在するかのように見える。そしてこれらが、彼が名辞を与え、名辞を奪い、お互いの名辞を混合したりする事物である。というのは、全ての事物が破壊されても、いまだなお残っている人というものを想定するという観点からすれば、すなわち、その人が考え、想像し、思い出したことを想定しているのであるから、その人にとっては、過去に考えたこと以外には存在しようがないからである。否、もし我々が、考慮したり推理したりしている時にまさに我々が行っていることを精密に観察するならば、すべての事物は世界に存在しているのだけれども、なお我々は

我々自身の幻想を算定しているに過ぎないことに気付くだろう。というのも、我々は宇宙や地球の大きさや運動を見積もる時に、その諸部分に分割可能な、もしくは運動が計測可能な宇宙へ上って行くのではなくて、書斎や暗闇の中で座りながら行なうからである。ここにおいて、事物は、問題が我々の精神の機能についてである時に我々がそれらを考慮する仕方、我々の精神の内的な偶有性として、もしくは本当は存在していないが唯一外在的に現れる外的な種類のものとして、もしくは我々なしに存在しているものとして考慮、すなわち説明されることになる。そして、このような方法で我々はこれからそれらを考察する。

2. 空間とは何か。

したがって、もし我々が、ある事物の方法的な世界消去の仮定以前に世界に存在したそれと同じ事物について思い出したり、それについての幻想を持つとしたら、そしてその事物がしかじかであったというようにではなく、ただ精神なしに存在するように考察するとしたら、我々は、直ちに、我々が「空間 *space*」と呼ぶ概念、すなわち、単なる幻想であり、その上全ての人があるように呼ぶまにその事物であるので、実際のところは想像的な空間の概念を手に入れるだろう。というのは、どのような人も、既に十分に満たされているものを空間と呼ぶのではなく、満たされる可能性があるものをそう呼ぶのであり、またどのような人も、物体がその空間を物体と一緒に運び去ると考えるのではなく、同じ空間が時にはある物を含み、時には別の物を含むと考え、空間がかつてその中にあった物体を常に伴うことなどありえないと考えるからである。そしてこのことは、なんらかの説明が全くのところ必要だと考えるのではなく、ある哲学者達によって誤った定義が空間に与えられていると気付くことで、自ずから明白となる。その哲学者達は、一つには、世界は無限のものであるという理由から推断を行い(というのは、「空間」を物体の延長と受け取り、そして延長を増加しつづけるものとする人は、物体は無限に延長する

と推断し得るからである)、もう一つには、同じ定義から、神でさえ一つ以上の世界を創造することが不可能であると早急に結論づけるという理由から推断を行う。というのは、もし別の世界が創造されるべきなら、彼は語るのだが、この世界なしには何もかも存在しないという事実からすれば、したがって(彼の定義に従うなら)どのような空間も存在し得ないので、新しい世界は何もない中に場所を占めなければならなくなるからである。しかしながら何もない中には、何も場所を占めることはできない。それに対し、彼は理由を示すことなしに断言のみを行うのであるが、これに反して、反対のことが真実なのである。というのも、既に充滿している空間にはそれ以上のものを入れることはできないので、新しい物体を受け入れるためには、充滿しているというより、なお余裕のある空間が必要となるからである。したがって、これらの人々の目的のために、そして彼らの同意のために多くを語ったので、私は自分の目的へ戻って、「空間」を以下のように定義する。空間とは、「単純な精神活動なしに存在する事物の幻想 *phantasm* である」、つまり、我々が他の偶有性ではなく、唯一我々なしに現れる事物を考察する幻想なのである。

3. 時間

物体が精神の中にその大きさの幻想を残すように、また運動する物体はその運動の幻想、すなわち、絶え間ない継続によってある場所から別の場所へ通過する物体という観念を残す。そしてこの観念もしくは幻想は、(常識的な意見やアリストテレスの定義を捨て去ることなしに)私が「時間 *Time*」と呼ぶものである。というのは、全ての人々が、一年は時間であると認め、その上、一年がある物体の偶有性もしくは影響であるとは考えないという事実からすれば、彼らは時間を我々なしの事物におけるものではないと認める必要性があるばかりではなく、精神活動の思考結果であるのみ認める必要があるからである。それゆえ、彼らが彼らの時代以前の時間について話す時、彼らは

彼らの以前の時代が過ぎ去ってしまった後、それらを思い出す記憶においての他はそれが存在し得ないとは考えない。そして日、年、月が太陽や月の運動であるといわれることに関しては、それが「過去 *past*」の運動、「無くなった *destroyed*」運動と同じであるという事実からすれば、そして「将来 *future*」の運動というのが、「いまだ開始されない」運動と同じであるという事実からすれば、彼らは、彼らが意味しないものは、何らかの時間であったことも、あり得ることも、そうである事もないという事になる。というのは、「現にそうである」もしくは「そうなり得る」と言い得ることはどんなことであれ、同じようにまたそれ以前において、もしくは将来においても「それである」と言い得るものだからである。その時、我々の精神作用において作られたそのような計算の名称以外の何が、日、月、年であり得るのか？したがって、「時間」とは幻想、唯一運動の幻想なのである。というのも、もし我々が、何らかの瞬間によって時が去り行くことを知るなら、我々は、太陽の、時計の、もしくは砂時計の中の砂のようなものの何らかの運動、もしくは他の運動を利用するし、また動くであろうと我々が想像する何物かに印をつけるだろうからである。我々が時間に気付く手段はこの他には全くない。そしてその上、私が「時間」は運動の幻想であるという時、私はこれがその定義にとって十分であるとは言わない。というのは、この「時間」という言葉は、第一に「ここ」、それから「そこ」という意味と同じように、物体の運動における「過去」そして「未来」、もしくは「継続 *succession*」の観念を包含するものだからである。それゆえ、「時間」についての完全な定義は、「時間とは運動における前後についての幻想である」ということになる。これはアリストテレスの「時間とは、過去と未来に従っての運動の数である」という定義に合致する。というのも、番号をつけるということは精神の行為であり、したがって、それは「時間とは、過去や未来にしたがっての運動の数であり、時間とは数えられた運動の幻想である」ということと同じだからである。しか

しながら、「時間とは運動の物差しである」という別の定義は正しくない。というのは、我々は運動によって時間を計るのであり、時間によって運動を計るのではないからである。

4. 部分

ある空間がその空間や何か別の空間を含む時、そしてある時間が別の時間を含む時、含まれる前者は含む後者の部分 **PART** である。ここからそれが含まれる何事かと比較されるものの他は、何事も「部分」とは正当には呼ばれないという結論が生まれる。

5. 分割

したがって、「諸部分に分ける」こと、もしくは分離すること、もしくは空間や「時間」を分割 **DIVIDE** することとは、それをその中においていくつかのものとして考察することに他ならない。それゆえ、もしある人が空間や時間を「分割」するなら、その人が持っている種々様々な概念は、一つのを分割することによってその人が作った諸部分以上のものになる。というのも、その人の最初の概念は、分割されるべきそれであり、それからそのいくつかの部分があり、またその他のいくつかの部分があり、それはその人が分割を続ける限り続くものだからである。

しかしながら、ここで、「分割」ということにおいて、私は、ある空間や時間を別のものから切断したり、分離したりすることを意味しているのではなく（というのは、誰も地球の半球が、別の半球から分離可能であるとか、もしくは最初の一時間が二番目の一時間から分離可能などと考えないからである）、考察の多様性を意味していることを銘記したい。それゆえ、分割とは、手の操作によって作られるのではなく、精神活動によって作られることになる。

6. 一つ

空間や時間が他の諸空間や諸時間の中で考察される時、それは一つ **ONE**、すなわち、「それらの

一つ」であると言われる。というのは、一つの空間が他のものに付け加えられたり、他の空間から減らされたりすることを除けば、そして時間についても同様なことを除けば、単に空間や時間と呼べば十分なのであり、もし別のものがあると識別され得ないのなら、一つの空間もしくは一つの時間というのは余計なことだからである。「一つ」に関する常識的な定義、すなわち「一つとは分割されないものである」とは、馬鹿げた結論として嫌悪すべきものである。というのは、分割されるものはどんなものでも多くのものであり、すなわち、全ての分割されたものは、分割されたものであるということになり、それは意味のない事であるという推断がなされ得るからである。

7. 数

数 NUMBER とは、「一つ」と「一つ」、もしくは、「一つ」「一つ」と「一つ」というようして進むものである。すなわち、「一つ」と「一つ」は「二つ」という数を作り、「一つ」「一つ」と「一つ」は「三つ」という数を作る。このようにして全ての他の数は作られ、それは、全てを一つにして、我々が言っているような、「数は個体である *number is unities*」ということになる。

8. 結合

諸空間に空間を、もしくは諸時間に時間を**混合すること TO COMPOUND**とは、最初に一つひとつを、次に全てを一つのものとして考察することである。それはあたかも、ある人が、最初は、頭、足、腕、そして体、として各々数えられ、それからそれらすべてを合わせて「人」として説明されるようなものである。そしてそれを構成している各々のものが全て置かれると、**全体**と呼ばれ、それら各々のものは、全体の分割によってそれらが個として考察される時に部分となるのであり、したがって、「全体」と「一つのものとして考えられた全ての部分」とは同じものである。そして、私が以前に「分割」において部分を別々にする必然性はないと銘記したことと同じことが、「結合

composition」においても理解されるべきである。というのは、全体を作り上げるためには、お互いの部分を実際的に接触するかのごとく部分を組み立てる必要があるのではなく、精神活動において一つの合計にそれらを集める事のみが必要だからである。というのも、全ての人々は、一緒のものとして考察され、人類全体として作り上げられるが、決して時と場所により分散させられることはないからであるし、12時間は、めいめいの日の時間なのだとしても、12という一つの数に混ぜ合わせ得るからである。

9. 全体

これはよく理解されていることであるが、そのものが諸部分の混合であると識別されず、また諸部分に分割されないものは、全体であるとは正しくは言えないことは明白なのである。それゆえ、もし我々が事物は部分を持つということを否定するならば、全体である同じものを否定することになる。たとえば、もし我々が、魂は部分を持たないというのなら、我々はどんな魂も全体ではないことを確言しているのである。また、事物は、分割されるまで部分をもたず、分割された時は、分割によりできたものと同じ数だけの部分があるということは明白なことである。そしてまた、部分の部分は全体の部分であり、「二」のように「四」という数の部分であるものは、「八」という数の部分でもある。というのは、「四」は「二」と「二」を足して作られるが、「八」は「二」と「二」と「四」の混合物であり、したがって、部分である「四」の部分である「二」とはまた、全体である「八」の部分だからである。

10. 空間と時間は隣接し継続している。

二つの空間は、それらの間に他の空間がない場合に**隣接している CONTIGUOUS**といわれる。そしてそれらの間に他の時間のない二つの時間は、AB, BCのように直接しているといわれる。

A B C

そして、時間はもとより、なんらかの二つの空

間も、それらが AC, BD, A B C D のように一つの共通の部分を持ち、ここでは、部分 BC が共通である時、**継続している CONTINUAL** といわれる。そして相互に隣接している全ての二つのものが継続している時、より以上の空間や時間が継続している。

11. 始まり、終り、距離、有限、無限

二つの他の部分の間の部分は**中間 MEAN** と呼ばれ、他の二つの部分ではないものは**末端 EXTREME** と呼ばれる。そして末端は、最初に数えられるものを、**始点 BEGINNING** といい、最後に数えられるものを、**終点 END** といい、中間のものは全てまとめて**距離 WAY** と呼ばれる。また、「末端の部分」と「限界」とは同じものである。そしてここから「始点」と「終点」とは我々がそれらを数える順序に依拠しているということが明白になり、「有限な」もしくは「限界のある」空間や時間とは、それらの「始点や終点を想像すること」と同じことなのであり、また全ての物事は、我々がそれを「限界づけて」もしくは「有限に」全ての方法で想像したり、しなかつたりすることに従いながら、**有限 FINITE** もしくは**無限 INFINITE** となる。そしてある数の「限界」とは「単一性」のことであり、これらについて我々が数える際に、最初のもが「始点」であり、最後のもが「終点」である。数が「無限」であると我々が言う時、我々はどのような数も表現していないという事のみを意味しているにすぎない。というのは、我々が「二」「三」「千」その他の数について語る時、それらは常に「有限」だからである。しかしながら、「数は無限である」ということ以外にはこれ以上もう何も言えないという時には、この「数」という名辞が「無限」という名辞であると言っているかのように理解されるべきなのである。

12. 力における無限とは何か。全体についてもしくは一つについては、何事も無限であるとは真には言えないし、また無限の空間もしくは時間、多数という事も言えない。

その空間や時間において割り当てられた限度より大きな数があり得ない歩幅や数時間というような、幾つかの有限な空間もしくは時間が割り当て得る時、空間や時間は「力において有限である」、もしくは「限界がある」と言われる。そして「力において無限」とは、与えられ得る幾つかの数より大きな数の歩幅や数時間が割り当てられ得たその空間や時間のことである。しかしながら、我々は、力において無限である空間や時間において、割り当てられ得る幾つかの数以上の歩幅や数時間を数える事ができるのではあるが、それでもなお、それらの数は常に有限である事を銘記しなければならない。というのは、すべての数は有限だからである。したがって、世界が有限であると証明することを請け負って、以下のような推論を行うのは正しいとは言えない。「もし世界が無限なら、我々から遠く離れた歩幅の無限の数の部分が得られるはずであるが、そのような部分はありえない。それゆえに、世界は無限ではない。」この命題は、大前提の帰結が誤っている。というのは、我々が精神活動において獲得したり構想したりするどのような無限の空間においても、我々からのそれと同じものの距離は、有限の空間にあるからである。というのも、その構想している場所において、我々は、我々自身が始まりを置いたその空間に、我々で終りを置くのだからである。そして人が精神活動において無限から両端を切り取ったものはどのようなものであれ、彼がそれを決定したもの、すなわち、彼が有限であるとしたものだからである。

無限の空間や時間については、それが「全体」もしくは「一つ」であると言うことはできない。すなわち、「全体」ではないとは、諸部分の混合ではないからである。というのも、諸部分は、それらがいかに多くあるとしても、個々のものは有限であるという事実からすれば、それらはまた、それらが全て一緒になり有限な全体をつくることにな

るからである。「一つ」ではないとは、それと比較できる別のものがなければ、何事も一つであるとは言われることはない。そして二つの空間や二つの時間が無限であるとは認識され得ない。最後に、我々が、世界は有限であるのか、無限であるのかを問う時、我々は我々の精神活動においては、その「世界」という名辞に該当するいかなるものも持たない。というのは、我々の計算は、恒星、もしくは九番目の、もしくは十番目の、否、千の天球へたどり着くことができるのではあるけれど、我々が想像するものはどのようなものでも有限なものだからである。その疑問の意味とは、我々が空間に空間を足し得るように、神は、実際のところ、物体に物体をどれほどでも大きく加えられ得るように作ったのだろうかということなのである。

13. 分割は最小を生じない。

したがって、空間や時間が無限に分割され得ると通常言われていることは、あたかもなんらかの無限の、そして永遠の分割があり得るというように理解されるべきではなく、「分割されるものはどのようなものでも、さらにまた分割され得るようなそれらの部分に分割される」、もしくは「最小に分割され得る物事は与えられない」という意味で受け取られるべきであり、もしくは幾何学者が「どのような量であれ、扱ひ得る限りは小さいとは言えない」というように理解されるべきであり、それは容易に以下のような方法で証明される。最も小さく分割されると思われる何らかの空間や時間を二つの同じ部分である、AとBに分割してみよう。私は、例えばAのような、それらのどちらも再び分割できると言う。というのは、部分Aが一方の側で部分Bに隣接すると想定し、他方の側がBに対するのと同等的ある他の空間に隣接すると仮定する。したがって、この与えられた空間より大きな全体の空間は分割できるのである。それゆえ、もしそれが二つの同等な部分に分割されるなら、真ん中の部分は、つまりAは、また二つの同等な部分に分割され得るし、したがってAは分割

可能であったということになる。

第8章 物体と偶有性について

1. 物体の定義。2. 偶有性の定義。3. ある偶有性はその対象において存在することはどのようにして理解され得るか。4. 大きさと何か。5. 場所とは何か。そしてそれは不動のものであるのか。6. 充満そして真空とは何か。7. ここ、そこ、どこか、それらの言葉は何を意味しているか。8. 多くの物体は一つの場所にはありえない、もしくは一つの物体は多くの場所にはありえない。9. 隣接する、そして継続的であるとはどういうことか。10. 運動の定義。どのような運動も時間なしには理解し得ない。11. 停止している、動かされた、動いているとはどういうことか。どのような運動も、過去と未来という概念がなければ識別されない。12. 点、線、面、立体とは何か。13. 物体や大きさにおいて、同等である、より大きい、より小さいとはどういうことか。14. 一つの同じ物体は、常に一つの同じ大きさである。15. 速度とは何か。16. 時間において、同等、より大きい、より少ない、とはどういうことか。17. 速度において、同等である、より大きい、より少ない、とはどういうことか。18. 運動において、同等である、より大きい、より少ない、とはどういうことか。19. 停止しているものは、何か外部のものによって動かされないかぎり、ずっと停止したままである。そして運動しているものは、もしそれが何か外部のものによって動かされないのなら、常に運動しつづける。20. 偶有性は発生し、なくなっていく。しかしながら、物体はそうではない。21. 偶有性はその対象から分離できない。22. もしくは動かされ得ない。23. 実体、形相、質料とは何か。24. 第一質料とは何か。25. 全体がそれのどの部分より大きい、ことはどのようにして証明されるか。

1. 物体の定義

我々は、我々なしには残存する何事も想定されず、全てのものごとが破壊される想像的な空間と

はどのようなものであるのかを理解したので、以前に存在したのものによって、我々の精神活動におけるそれら自体の想像物が残ることになる。さて、それらの事物のあるものが世界に再び場所を占め、新たに創造されると仮定してみよう。そうすると、この新しく創造されもしくは再配置された事物は、上述の空間のある部分を満たすだけでなく、もしくはそれらに一致しそれと同等の広がりを持つばかりではなく、またそれは我々の思考に依存するものでもないことが必然的となる。そしてこれが、その空間的な広がりゆえに我々が普通「物体 *body*」と呼ぶものである。そしてそれが我々の思考に依存しないので、「それ自体で存在する事物」であると我々は言い、また我々なしに在るので「現存するもの」といわれる。そして最後に、それは「対象」と呼ばれる。なぜなら、それは想像的な空間に場所を占め、対象化され、感覚によって識別されるのと同様に、理性によっても理解され得るからである。したがって、「物体」の定義は以下になる。「物体とは我々の思考に依存せず、空間のある部分に一致し、それと同等の広がりを持つものである。」

2. 偶有性の定義

しかしながら、「偶有性 *accident*」とは何かということは、例示による何らかの定義によっては容易に説明できるものではない。ある空間を物体が満たしていると、もしくはその空間と共存していると想像してみよう。その共存は共存している物体ではない。そして似たように、同じ物体がその場所から取り去られたと想像してみよう。その除去は物体の除去ではない。もしくは同じものが取り去られないと考えてみよう。除去されない、もしくは停止しているその物体は、停止している物体ではない。それならばこれらの物体とは何か。それらは、その物体の「偶有性」である。しかしながら、問題は、我々が既に知っているものを尋ねることが「偶有性とは何か」ということであり、我々が尋ねるべきものを「偶有性とは何か」と問うことではないことである。というのは、誰も、何

らかの事物が広がりを持ち、動き、動かされると言う人のことを、常に同じ仕方では理解することはできないからである。しかしながら、大半の人は、偶有性が実際には自然的な事物の部分ではない場合でも、「偶有性とは何かである」、すなわち、自然的な事物の部分であると言うだろう。これらの人々を、満足し得ることはもとより、満足させるために、彼らは「偶有性とは、ある物体が識別される仕方である」という最高の定義を答える。それはあたかも彼らが「偶有性とは、我々において、その物体が、それ自身の概念として働くことによるその物体の機能のことである」と言うことと同じものである。この定義は提出された疑問の答えにはなっていないのだけれども、なおこれまで提出されて来たであろう疑問、すなわち、「ある物体の一つの部分がここに現れ、別のものはそこに現れるのはどうしてか」という疑問への答えとなる。というのは、これは以下によりよく答えられるからである。「それはその物体の広がりから起こる」、もしくは「物体全体が、継続により、今ここにも、そこにも見えるというようなことはどのようにして起こるのか」という問いには、「運動によって」と答えられる。もしくは最後に「ある物体が、以前と同じ空間を占めるのはどうしてか」という疑問に対しては、「それが運動しないからである」という答えが得られるだろう。というのも、もし、物体の名辞に関して、すなわち、具象化した名辞に関して、「それは何か」と聞かれれば、答えは定義によって作らざるを得ないからである。というのも、この疑問は名辞の意味に関することだからである。しかしながら、もし抽象的な名辞に関して「それは何か」と問われれば、その目的はなぜ事物はそのように現れるのかということなのであり、あたかもそれは「固いとはどういうことか」と問われているようなものであり、答えは、固いとは、全体が移動すればそのどの部分も残れないということである、と答えることになる。しかしながら、もし「固さとはなにか」と問われれば、目的は、なぜ、全体が移動する以外、部分が移動しないのかを明らかにすることである。

これゆえ、私は、「偶有性とは、物体についての我々の概念における在り方 *the manner of our conception of body*」であると定義する。

3. 偶有性がその対象の中にあるとはどのようにして理解されるか。

「偶有性」が「物体の中にある」と言われる時、それはあたかも何事かがその物体の中に含まれるというように理解されるべきではない。というのは、例えば、あたかも、赤色が血の中にあるのなら、同じような在り方で、血色の布の中にも血が、つまり、全体における部分としてあることになるからである。というのも、そうであれば、偶有性もまた物体であることになるからである。しかしながら、大きさ、静止、もしくは運動が、それが大きいもの、静止しているもの、もしくは運動しているものの中にあるように、(それがどのように理解されるかは、全ての人の理解によるのだが) 全ての他の偶有性も、その対象の「中にある」と理解されるべきである。そしてこれはまた、アリストテレスによって、他に方法がないほど否定的に説明がなされている。すなわち、「偶有性は、その対象の何らかの部分としてではなく、その対象が取り去られてもいまだその対象が残っているかのごとくその対象自身の中にある」。物体が消滅することを除けば、決して消滅することのないある偶有性があることを除けば、上記のことは正しい。というのは、どのような物体も空間的な広がりもしくは形がなければ識別されることはないからである。全ての物体に共通しているのではなく、ある物体だけに固有の、つまり、「静止している」「動いている」「色」「固さ」その他の似たような全ての他の偶有性は、絶え間なく消滅し、他のものによって継続されるが、なおその物体そのものは消滅することがない。そして全ての他の偶有性は、延長、運動、静止、もしくは形がある物体の中に、同じ仕方では存在しないというある者達の意見に関しては、つまり例えば、色、熱、匂い、徳、悪徳そしてその類似物が、それらの中に別のものとして、いわゆる「生まれつき、固有のもの」として

あるという意見に関しては、私は、推論によって、これらの偶有性が知覚者の精神活動の、もしくは知覚された物体それ自身の運動ではないのかどうかを明らかにするまで、彼らが、ただいまのところは、判断を一事停止することを望みたい。というのは、この探求の中に、自然哲学の大半のものが存在するからである。

4. 大きさとは何か。

物体の「空間的な広がり *extension*」とは、その「大きさ *magnitude*」もしくは、人が「真なる空間 *real space*」と呼ぶものと同じものである。しかしながら、この「大きさ」は、想像的な空間が依拠するようには我々の思考力に依拠してはいない。というのは、想像的な空間とは我々の想像の結果であるが、「大きさ」とはその原因であるからである。想像的な空間は精神活動の偶有性であるが、物体は我々の精神活動の外に存在する。

5. 場所とは何か、そして不動の場所とは何か。

私が空間という言葉を想像的な空間と理解していることによって、その空間は何らかの物体の大きさと一致するので、空間とはその物体の「場所 *place*」であると呼ばれる。そして、物体それ自体は、我々が「場所を占めた事物」と呼ぶものである。ここにおいて、場所を占めた事物の「場所」と「大きさ」とは異なることになる。第一には、物体は、静止している時も、運動している時も、同じ「大きさ」を維持する。しかしながら、運動している時、それは同じ「場所」を維持しない。第二に、「場所」は、しかしかの量と形態の何らかの物体の幻影であるが、しかしながら、「大きさ」は、各々の物体に固有な偶有性である。というのは一つの物体はいくつかの時に、いくつかの場所を占めることができるが、常に一つの同じ大きさだからである。第三に、「場所」は精神活動以外の何ものでもなく、また「大きさ」は精神活動の中の何事でもない。そして最後に、「場所」とは架空の空間的な広がりであるが、「大きさ」は真の広がりであるということである。そして、場所を占める物体は、

空間的な広がりではなく、広がっている事物のことである。その他には、「場所は不動である」ということがある。というのは、動くものは、場所から場所へ運び去られると理解されるという事実からすれば、もし場所が動かされるのなら、また場所も場所から場所へ運び去られてしまうからである。それゆえ、ある場所は別の場所を持たねばならず、その場所も別の場所を持たねばならず、それは無限に続き、およそ馬鹿げた事態になるからである。そして、「場所」を、「真なる空間」と共にあるその本質であるということにすることによって、その理由からそれを不動である主張する者たちは、彼らはそのようなことは知覚しないのではあるけれど、場所を単なる幻影としてしまうのである。というのは、ある人が、空間が一般的にそこで考察されるので、場所とは、それゆえ、不動のものであるということ肯定する一方で、もしその人が名辞や印の他は何ごととも一般的であったり、普遍的であったりしないということ思い出すなら、彼は彼が言及するその空間が一般的に考察されることはなく、物体の大きさや形についての、記憶や精神活における幻影以外の何ものでもない事を容易に見出すからである。そしてもう一方では別の人が、真の空間は知性によって不動なものとして作られると言う。それは我々が、流れる水の外観において、次から次へと継続する水の流れを想像し、知性によってそこでその外観を固定させ、それが川の「不動の場所」となる場合である。彼はそれを曖昧な錯綜した言葉で語るのではあるが、彼はそれを、幻影以外の如何なるものになし得るのだろうか。最後に、「場所」の本質は、「取り巻いている表面 *superficies of the ambient*」にあるのではなく、「充実している空間 *solid space*」にあるということである。というのは、全体を占めている物体は、その全体の場所とそして同じ場所の各々一致する部分とともにあるそれについての各々の部分と共存している。しかしながら、各々の場所を占めている物体が充実したものである点から見ると、表面と共存しているとは理解されないのである。その他、もしある物体全体

が、その全ての部分が一緒に運動しないなら、どうして全体が移動し得るのかという問題がある。もしくはそれらの場所から取り去れること以外に、物体の内的な諸部分はどういうにして移動し得るのかという問題がある。しかしながら、物体の内的な諸部分は、その物体と共にある外的な部分の表面から取り去ることはできない。したがって、もし場所が周囲を取り巻いている表面ならば、その時には、運動する物体、つまり運動する諸物体の諸部分は運動しないという帰結に当然になる。

6. 充滿している、そして真空であるとは何か。

物体によって占有されている空間や場所は「充滿 *full*」していると呼ばれ、占有されていない場合は「真空 *empty*」であると呼ばれる。

7. ここ、そこ、どこかという名辞は何を意味しているか。

「それはどこか」という疑問に答えるために作られる「ここ」「そこ」「田舎」「都会」その他の類似した名辞は、場所の本当の意味での名辞ではないし、捜し求められている場所を独りでに思い出させるものでもない。というのは、「ここ」そして「そこ」という名辞は、もし、指差したり、もしくは何か他のことと同時に示されなければ何事も意味しないからである。しかしながら、探し求めている彼の眼が眼差しやその他の印により、探し求めている事物を指し示す時、その場所は返答をする人によって明瞭に定められたわけではなく、尋ねている人によって見つけ出される。さて、我々が「田舎で」「都会で」と言う時のように、言葉のみでつくられた上記のような提示は、我々が「田舎で」「都会で」「その道で」「家の中で」「寝室で」「ベッドで」と言う時よりも、より範囲が大きい提示である。というのは、これらは少しずつ、探し求める者をその目的の場所に近づけるよう指し示すのであり、その上、それらの名辞は目的物に特定することはないのだが、より狭い場所へと制限して行き、全体の部分であるようなそれらの言葉に

よって意図された一定の空間の中にその事物があることだけを意味していくからである。そして「どこ」という疑問に対して作られる答えによるその名辞は、最も高次の「類概念 *genus*」として、「どこか」という名辞を持つ。それゆえ、「どこか」ということは、どのようなことであれ、「田舎で」「都会で」もしくは似たような名辞で意味されているより大きな場所の部分である場所がどこかということであると理解される。

8. 多くの物体が一つの場所にあることは出来ないし、一つの物体が多くの場所にあることもできない。

物体と物体の大きさや場所は、全く同一の精神活動によって分割される。というのは、空間的な広がりを持つ物体、そしてその空間的な広がり、その場所の空間的な広がり観念を分割することは、それらの何らかの一つを分割することと同じことだからである。なぜなら、それらは一致するものであり、精神活動、つまり、空間の分割によってはなされ得ないからである。それゆえ、ここから、二つの物体が同じ場所で一緒に存在し得ないということ、もしくは、一つの物体は同時に二つの場所にはあり得ないということが明白となる。二つの物体は同じ場所にはないということは、その場所の全体を占めている一つの物体が二つに分割される時、それゆえ、そこには二つの場所があることになるからである。一つの物体が二つの場所にあることはないということは、二つに分割された物体の場所においては、その場所の物体もまた二つに分割されるからである。というのも、私が言うように、一つの場所とその場所を占めている物体は、両者一緒に分割され、そしてそこには二つの物体があることになるからである。

9. 隣接する、継続するとはどういうことか。

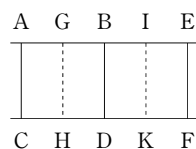
二つの物体は、空間がそうであることと同じ仕方、お互いに「隣接している *contiguous*」「継続している *continual*」といわれる。すなわち、「それらはどのような空間も挟まずに隣接している」

といわれる。さて、ここでは以前のように、私は、空間を、物体の観念や幻影と理解している。それゆえ、二つの物体の間にどのような他の物体も置かれず、そして帰結としてどのような大きさも、いわゆる真の空間もないのではあるが、それでもなお、もし別の物体を受け入れ可能な、ある大きさの空間が間にあるのなら、その時には、それらの物体は、隣接してはいない。そして、これらのことを理解する事は容易なことである。しかしながら、哲学の他の分野では熟達している人が、このことに関して異なる意見を持つことが私には不思議なのである。しかしながら、私はその大半の人が、あたかも「鬼火 *ignis fatuus*」によって道に惑わされるように、真実から形而上学的瑣事によって惑わされていることに気付いている。というのは、自然の感覚を持つ人は、誰であろうと、二つの物体の間にどのような物体もないという理由で、お互いの物体が必然的に接触しなければならないなどは考えないし、もしくは、「真空 *vacuum*」はあり得ない、なぜなら「真空」とは何もないことだから、もしくは、いわゆる「何も存在しない *non ens*」ということだからであるなども考えないからである。もし次のように考える人がいたら、それは子どもじみている。誰も断食などできない。なぜなら断食とは何もないものを食べることであり、何もないものは食べられないからである。「継続的であるとは、二つの物体が共通の部分を持つということである。そして二つ以上が継続的である場合は、各々が次のものにお互いに継続している。」

10. 運動の定義。どのような運動も時間と共にでなければ理解し得ない。

運動 MOTION とは「一つの場所の絶え間ない停止か、別の場所の絶え間ない獲得」である。そして、停止しているその場所は、通常「出発点」と呼ばれ、獲得される別の場所は、「到着点」と呼ばれる。私は、どのような物体も、それがどれほど小さいものであれ、完全に直ちに、前の場所から別の場所へ行くことは出来ず、両者、すなわち停

止している場所と獲得する場所とに共通している場所が存在すると言う。例えば、ある物体が、場所 ACBD にあるとしよう。



同じ物体は、最初は、GHİK へ行かなければ、場所 BDEF には行く事ができないはずである。場所 GHBD は、場所 ABCD と場所 GHİK の両者に共通のものである。そして場所 BDIK は、場所 GHİK と BDEF の両者に共通のものである。ここにおいて、どのような事物も時間なしに動くことができるということは考えられないこととなる。というのは、時間とはその定義により、幻影、すなわち運動の概念だからである。したがって、時間のない何事かの運動を考えることは、運動なしの運動を考えることであり、それは不可能なことなのである。

11. 静止している、動いている、動かされたとはどういうことか。どのような運動も、過去と未来の概念なしには考えられない。

「いつ何時でも、一つの場所にあるものは静止しているといわれる。そして現在静止しているかもしくは動いているかどちらかにしても、現在のところにあるそれが以前は別の所にあったのなら、それは動く、もしくは、動いているといわれる。」この定義から、まず最初に、「動かされるものはどんなものでも、動いている」ということが推断される。というのは、それがもしまだ以前と同じ場所にあるのなら、「静止」の定義により、静止している、つまり、動いていないからであり、しかしながら、それがもし別の場所にあるのなら、「運動」の定義により、動いているからである。第二に、「動かされるものは、なお動かされる」ということが推断される。というのは、動かされるものは、その場所から去り、従って別の場所へ移動し、

そしてさらに動かされることになるからである。第三に、「動かされるものは、どんなものでも、いつ何時でも、どれくらい少しの時間でも、一つのところには留まっていはいない」ということが推断される。というのは、静止の定義により、いつ何時でも一つの場所に留まっているものは、静止しているものだからである。

運動に反対するある種の詭弁があり、それは上記の最後の命題の無理解から生じていると思われる。というのは、彼らは、「もし何らかの物体が、動かされるのなら、それはそれが存在する場所において動かされるか、もしくは、それが存在しない場所において動かされるかのどちらかであるが、両者は誤りであり、したがって、何事も動かされない」と言うからである。しかしながら、誤りは命題の大前提にある。というのは、動かされるものは、それが存在する場所において動かされるのでもないし、それが存在しない場所で動かされるのでもなく、それが存在する場所から、その存在しない場所へ動かされるからである。実際のところ、動かされるものはどんなものでも、どこかへ動かされるということ、すなわち、ある空間の内部で動かされるということは否定できないが、しかしながら、その時、その物体の場所は、空間の全体ではなく、第7節で述べたように空間の一部なのである。以上の証明から、すなわち、動かれるものはどのようなものでも、また動かされている、そして動くということから、過去と現在という時間を考えることがなければ、どのような運動の概念もあり得ないということが推測される。

12. 点、線、面、立体とは何か。

ある程度の大きさを持たない物体などないのであるが、なお、物体が運動する時、その大きさを全く考慮しないとしたら、それが作り出す道程は「線 *line*」もしくは1次元と呼ばれる。そして、それが経由する空間は「長さ *length*」と呼ばれる。そして、物体それ自体は「点 *point*」と呼ばれる。その意味において、地球は「点」であり、その公転

の軌跡は、「黄道 *ecliptic line*」と呼ばれる。しかしながら、もし動かされている物体が「長さ」として考慮されるなら、そしてその別々の部分全てが別々の線を作ると理解されるように動かされると考慮されるなら、その時には、その物体の全ての部分の軌跡は「幅」と呼ばれ、それが作る空間は、一方は物体の各々の部分に対応し、他方は全体に適應され、二次元で構成される「面 *superficies*」と呼ばれる。またもし「面」を持つと考慮される物体が、その全ての部分が各々の線の軌跡を描いて動かされるとすれば、その時は、その物体の各々の軌跡は「厚さ *thickness*」「深さ *depth*」と呼ばれ、それが作る空間は、二つの要素が第三の要素に適應する三次元によって構成される「立体 *solid*」と呼ばれる。

しかしながら、もし物体が「立体」と考えられたなら、その時には、その別々の部分の全てが別々の線の軌跡をとる事はありません。というのは、動かされるものはどんなものでも、後に続く部分の軌跡は、前の部分の軌跡と同じものになるだろうからであり、それゆえ、同じ立体は、最初に面それ自体が形成するものに留まることになるからである。したがって、私がいま記述した三つ以上の次元は、物体においてはありえない。後に示す「速度 *velocity*」、それは「長さ」に従っての運動なのであるが、それは「立体」の全ての部分に適應し、四次元を構成する運動の大きさを作り出し得るとはいえ、それは、黄金の価値が、その全ての部分を合計して値段や価値を作り出すようなものである。

13. 物体と大きさにおいて、同等、大きい、より大きい、より小さいとは何か。

「物体」は、たとえそれらがどれほどの数であろうとも、いずれのものも、いずれのものも場所を占めることができれば、いずれのものも、他のいずれのものに対し「同等」であるということができる。さて、一つの物体は、たとえ他の物体と同じ形ではなくとも、もし、諸部分の屈曲や転移により、同じ形に変わると理解されるなら、別の

物体が占めていた同じ場所を占めることができる。そして「一つの物体は、その部分が、他の物体の全てと同等の時、他の物体より大きく、その全てが、他の物体の部分と同等の時、より小さい」ということになる。また、「大きさ」も、同じ理由により、すなわちそれらの大きさの物体が「同等」「大きい」「小さい」時、他の物体と比べ「同等」「大きい」「小さい」ということになる。

14. 一つの同じ物体は、常に一つの同じ大きさである。

一つの同じ物体は、常に一つの同じ大きさである。というのは、物体、そしてその大きさ、場所は、それらが一致するような在り方以外には、精神活動において把握しようがないという事実からみると、もし、何らかの物体が静止している、つまり、ある時間、同じ場所に留まっていると理解されるなら、そしてその大きさがその物体の場所より大きな時間の一部であり、また時にはより小さな時間の一部であるのなら、その同じものは、時にはより大きいものに、時にはより小さいものに一致することになる、つまり、同じ場所がそれ自体で大きくなったり、小さくなったりということになり、それは不可能なことである。しかしながら、もし、物体やその大きさについてどのような意見も存在しないのなら、その事物が「希薄である *rarum*」そして「濃密である *densum*」ことのその本質の説明として、その原理を利用するために、物体がその大きさと分離されて存在し得ることが、そしてその物体に貯蔵されているより大きなそしてより小さな大きさを持ち得るということが、それ自体において明白である事物を証明する必要性は全くない。

15. 速度とは何か。

一定の長さが、一定の時間によって媒介される限りにおいて、運動は、速度 **VELOCITY**、もしくは「速さ *swiftness*」、その他の名称で呼ばれる。というのは、「速さ」とは、大きさがそのより小さいものとの関係で大きいとされるように、「より遅い

もの」、もしくは「速くないもの」と関係づけて理解される事が度々であるのだが、それでもなお、大きさが哲学者によって広がり毎に絶対的に計られるように、また「速度」や「速さ」もその長さに従いながら、運動毎に絶対的に計測されるからである。

16. 時間において、同等、より大きい、より小さい、とはどういうことか。

多くの運動は、それらの各々一つが他の運動とともに始まり、ともに終わる時、もしくは、もし一緒に始まり、同時に終るなら、同等の時間になされたといわれる。というのは、時間は、運動の幻影なのではあるが、現れ出した運動以外では計測され得ないからである。それは、時計の文字盤が太陽や手によって動かされるようなものである。そして、もし二つのもしくはそれ以上の運動が、この運動と共に始まり、終われば、それらは、同等の時間の中でなされたといわれる。そして、またここからより大きな、もしくはより長い時間に、そしてより短い時間に、もしくはより短く動かされるとはどういうことが容易に理解される。すなわち、それがより長く動かされるとは、別の始まりを持ち、より遅く終わる、もしくは一緒に終わるが、より早く始まるということである。

17. 速度において、同等、より大きい、より小さい、とは何か。

運動は、同等の長さが同等の時間によって媒介される時、同等の速さであるといわれる。そしてより大きな速さとは、同等の時間でより大きな長さが経過されるということ、もしくはより少ない時間で同等の長さが経過されるということである。また同等の長さが時間の同等の諸部分を経過する速さは、「等速 *uniform*」の、「速さ」もしくは「運動」と呼ばれる。そして、時間の同等諸部分において同等に増加したり減少したりすることによってより速くなったり、より遅くなったりする「等速ではない」運動は、「等加速運動」もしくは「等減速運動」と呼ばれる。

18. 運動において、同等、より大きい、より小さい、とは何か。

しかしながら運動は、一定の時間に媒介される長さの側面ばかりではなく、つまり、速さの側面ばかりからではなく、その大きさの全ての最小部分にあたる速さについても、大きい、小さい、同等という事がいわれる。というのは、ある物体が動かされる時、その全ての部分もまた動かされるからであり、その物体が半分になったと仮定しても、その半分の物体は、もう一つの半分と同じ速さを持つだろうし、また各々は全体と同等の速さを持つからである。しかしながら、全体の運動は、それと一緒にあって同等の速さであるどちらもの二つの運動と同等である。したがって、二つの運動がお互いに同等であることと、それらが同等の速さである事は別のことである。そして、横に並んで引かれて行く2頭の馬においては、両方の運動は、それら1頭の運動の速さと同等である事は明白であるが、しかしながら、両者の運動は、それら1頭だけの運動より大きい、すなわち、2倍である。したがって、「運動は、その大きさの全ての部分が計算された一方の速さが、その大きさの全ての部分がまた計算された他方の部分の速さと同等である時、お互いに同等であると単純にいわれる。そしてそのように計算された一方が、またそのように計算された他方のものより大きい時、大きいと言われ、小さい時には小さいといわれる。」加えて、このような仕方では計算される運動の大きさは、通常、力 **POWER** と呼ばれる。

19. 外的な物体に動かされる時を除けば、静止している物体は、常に静止し続ける。

「静止しているものはどんなものであれ、もしそれの他に、そのものがもはや静止をし続けられないように、運動によりそのものの場所へ入り込む努力 *endeavouring* によって影響を与える何らかの他の物体が存在しないのなら、常に静止し続けるだろう」というのは、有限の物体が存在し、静止しており、その他には空間に何も無いということ仮定すると、ここで、もしこの物体が動かさ

れ始めるとするなら、それには確かには幾つかの方法があるだろうからである。したがって、物体にはその静止を妨げるものは物体の内には何もないという事実から見ると、ある方法によって動かされる理由はその外部から来るものであるということになる。同様に、もし、それが何らかの別の方法で動かれるなら、その運動の理由もまたその外部の何かから来る。しかしながら、その外部からは何事も来ないと仮定する観点に立てば、ある運動の様態の原因が、他の運動の様態の原因と同じことになってしまうので、それゆえ、全ての運動は直ちに同じ様態のものになってしまう。そしてそれは不可能なことである。

同様に、「運動しているものはどんなものであれ、静止される原因となるその他の物体がなければ、常に運動し続ける」というのは、もし我々が、その物体の他には何もないと仮定するのなら、それが別の時よりもむしろ現在静止すべきである理由は何もないからである。もしそうならば、その運動は、似たような時間の全ての部分においても停止することになり、それは到底理解し得ないことだからである。

20. 偶有性は生成し、消滅するが、物体はそうではない。

我々が、動物、もしくは樹木、もしくは何らかの特定の物体を、「生成した *generated*」、ないし、「消滅した *destroyed*」と言う時、あたかもそれは、非物的なもの、もしくは物体の物体ではないような、造られた物体と理解されるのではなく、動物ではない動物の、樹木ではない樹木の、つまり、我々があるものを動物と呼び、別のものを樹木と呼び、別のものを他の名前と呼ぶそれらの偶有性を持つ造られた物体が生成し、消滅するというように理解されるべきである。したがって、以前にそれらに与えられた名辞は、今や同じ名辞をそれらに与えることはできない。しかしながら、我々があるものに物体の名辞として与えた大きさは、生成することも、消滅することもない。というのは、我々は我々の精神活動において、点を巨大な

ものとして作り上げ、そして再びそれを点に縮小することができるのではあるが、つまり、我々は、以前はそこになかった何事かの発生を想像することができるのであるが、そして以前は何事かがあったところに何もないかのごとく想像することができるのであるが、それでもなお、我々は、我々の精神活動においては、どのようにして自然の中でこれが為され得るのかを知ることはできないからである。したがって、自然理性に従う哲学者たちは、物体は生成することも消滅することもなく、我々に対してそれ以外にはない様相であらわれ、つまり、異なった「種類」のものとして現れ、帰結として、別のもの、そして別の名前と呼ばれることになる想定する。それゆえ、いま人間と呼ばれるものは、別の時には、非人間という名辞を持つ。しかしながら、一度物体と呼ばれたものは、非物体とは呼ばれない。しかしながら、大きさや空間的な広がりを除く他の全ての偶有性が生成し、消滅するのは明白である。つまり、白いものが黒くされる時、そのものの中の白さは消滅するのであり、それまではそこに無かった黒さが生成する。したがって、物体と種々様々に現れる偶有性においては、物体とは物自体のことであり、生成せず、偶有性とは生成し、物自体ではないという差異が存在する。

21. 偶有性はその対象から離れることはできない。

したがって、他のものや他の偶有性によって、なにものが、以前にそうであったものとは別のなにものかとして現れた時、偶有性がある対象から別の対象へ移ったと考えるのではなく、(というのは、前に記述した通り、それらは全体の一部として、もしくはそれを含んでいるものに含まれるものとして、もしくは家における家族の主人として、対象の中にあるのではないからである) ある偶有性が消滅し、別のものが生成したと考えるべきである。例えば、動いている手がペンを動かす時、運動は手からペンへ移るのではない。というのは、手は立ち止まったままなのではあるが、書

き物は継続し得るからであり、新しい運動がペンにおいて生成し、それはペンの運動だからである。

22. そして動くこともできない。

したがって、我々が「形 *figure* は取り去られた物体の偶有性である」という代わりに、「物体がその形を取り去る」と言う時、偶有性が動くというのはまた妥当な言い方ではない。

23. 本質、形相、質料とは何か。

さて、我々が一定の名辞をある物体に与えるその偶有性は、もしくは、その対象に名称を付す偶有性は、理性的であることが人間の本质であり、白さが白いものの本質であり、空間的な広がり物体の本質であるように、通常は物体の本質 **ESSENCE** と呼ばれる。そして同様の本質は、それが生成する限りにおいて **形相 FORM** と呼ばれる。また、物体は偶有性のある側面においては **対象 SUBJECT** と言われ、形相のある側面においては **質料 MATTER** と呼ばれる。

また、偶有性が産出することと消滅することを、その対象が「変化する」といい、唯一、形相の産出や消滅のみが「生成や消滅」といわれるのであるが、全ての生成や変成において、「質料」の名辞は残る。というのは、アリストテレスは、『形而上学』の中で、木で作られたものが、「*ξύλου*」ではなく、「*ξύλινου*」と呼ばれるように、つまり、木ではなく、木製と呼ばれるように、何ものかで作られたものはどんなものであれ、「*ε-κεινι*」ではなく、「*εκεινινου*」と呼ばれるべきであると言ったのではあるが、木で作られた机は木製であるばかりではなく木材であり、真鍮の彫像は真鍮製である上に真鍮でもあるからである。

24. 第一質料とは何か。

全てのものに共通で、アリストテレスに続く哲学者たちが通常「*materia prima*」、つまり「第一質料 *first matter*」と呼ぶ質料は、他の全ての物体から区別される物体ではないし、それらの一つでもない。それでは一体それは何か。それは単なる

名辞である。しかしながら、無益に使用される名辞ではない。というのは、名辞は、大きさや空間的な広がり、そして形相や他の偶有性から受け取る性質を除けば、形相や偶有性を考慮することなしの物体の概念を意味するからである。それゆえ、我々が「一般的に物体」という名辞を使用する時にはいつでも、もし我々が「第一質料」という名辞をしようするならば、それはよく為しえることである。というのは、水もしくは氷のどちらが最初のものであったのか知らない人が、その二つのどちらかが双方の質料であると発見した時、これら二つのどちらでもない第三の質料があると喜んで想定することになるように、全てのものについての質料を発見しようとする人は、存在している何らかの質料はそれではないと想定すべきことになるからである。それゆえ、「第一質料」とは何事でもないということになり、したがってそれらは、量であることの他は形相であることにも、偶有性であることにも寄与しないのであり、これに反し、全ての個々のものは、それらの一定の形相や偶有性を持つことになる。

したがって「第一質料」とは、一般的な物体、つまり、形相も偶有性も持たず、形相でも偶有性でもない普遍的に考察される量のことなのであり、それらが論証されることはない。

25. 全体がそれのどの部分より大きい、ということとはどのようにして証明されるか。

以上のことから、大きさの同等と不平等について、ユークリッドによって彼の第一原論の始まりにおいて仮定された公理を証明することができ。その中でも、残りの部分は省いて、私はここで唯一「全体はそれのどの部分よりも大きい」ということを証明しようと思う。それは読者がそれらの公理が証明できないものではないことを知り、したがって証明の原理ではないことを知らせるためである。そしてここから、それらがそのようなであると少なくとも明晰ではないことを、ユークリッドがどのようにして原理と認めたか、注意深く学ぶことができるのである。「より大きい」と

は、その部分が別のものの全体と同等であること定義できる。ここで、もし我々がある全体をAと仮定し、そしてその部分をBと仮定するとする。ここでB全体はそれ自身と同等であり、同じBはAの部分である。したがって、Aの部分は全体B

と同等になる。それゆえ、前出の定義により、AはBより大きくなり、それは証明されたのである。

(以下次号)

(2007年10月5日受理)